

## [チーフ報告] 白金校舎学生スタッフ報告

### 【白金学生スタッフとは】

主に白金ボランティアセンター（以下ボラセン）の5つのプロジェクト（以下PJ）にそれぞれ所属し、ボランティアを行う「player」としてだけでなく、ボランティアをコーディネートする「manager」として「人と人をつなぐ架け橋になること」を目標に活動している。PJという自分のフィールドを持ちつつも、その枠を超えて様々な活動に参加することで、多様なコラボレーションを創出することを目指している。

### 【2011年度の活動】

前年度2月の研修会で、各PJの方針が決定した。しかし、ひと月も経たずして東日本大震災が起これ、その方針は早々に見直されることとなった。東日本大震災によって、一瞬にして日本全体が「今、楽しいことはするべきでない」という風潮に染まったため、活動を再開することは非常に難しかった。本学も諸活動の自粛、登校停止、新学期を5月からスタートさせることなどを次々と発表した。

そんな中4月12日、学生スタッフ会議が開かれた。学期に一度の研修会でしか会議を持たない私たちには異例のことであったが、ここで春学期の計画や活動方針を練り直した。同月18日にはMG natural第6号の打ち合わせが行われ、発行までのスケジュールを立ててメンバーに告知。その後、各PJがつながりのある外部団体にMG naturalへの寄稿をお願いした。同月20日には、筆者が東北学院大学へ向けた手紙を書き、現地に届けられた。同月29日には「いまこそ、ふれあい」というスローガンを掲げ例年通り行われた、白金小学校のふれあい運動会に参加した。6月8日、再度学生スタッフ会議を開き、しろかねサラダの活動形態を見直した。代表が不在となり、構成メンバーも学生スタッフのみであったしろかねサラダは、「白金地域の活動」（68ページ参照）として、学生スタッフの活動に吸収されることとなった。よって、ボランティアファンド学生チャレンジ賞を受賞していたDeep Map第3号の作成も学生スタッフに引き継がれ、8月に完成した（76ページ参照）。9月8日には現在、両校地学生スタッフである大西康友が主催した意見交換会が行われた。大西は、自身がまったり過ごす会（72ページ参照）に参加したことをきっかけに、白金学生スタッフの活動に興味を持ち、「校舎の隔たりによって、面白い活動に出会える可能性が減ってしまうのはもったいない。自分が繋ぎ役となって、横浜校舎に通う学生にも白金で行われている学生活動を知ってほしい」という思いでこの意見交換会を設定した。本学では1・2年生が横浜校舎に通うために、新メンバーとの出会いを求めていた白金学生スタッフらにとっては転機であった。9月半ばにMG natural第6号が完成し、同月20日からは夏合宿（66ページ参照）が行われた。ここで、改めて意見交換会の内容を共有し、さらに議論を深めた結果、「情報屋兼コーディネート事業」を学生が行う新しいPJ「大西屋」（80ページ参照）が誕生した。

秋学期は夏合宿で立てた計画に沿って、各PJとも活発に活動した。11月9日にはMG☆SUZUでつながりのある、日本学術振興会特別研究員の荒井裕樹さんをお迎えして「学生スタッフ勉強会」を行った。夏合宿で話題になった「活動における‘土台（軸）’とは一体何だろう？そしてどのように形成されていくのだろうか？」という率直な問いを荒井さんに投げかけ、それに答えて頂くという内容の講演をして頂き、7名の学生スタッフが参加した。12月9日は、恒例の白金合コンを開催できた（73ページ参照）。

#### 【今年度を振り返って】

2011年度は「波乱」の一言に尽きる。震災に伴う大きな波にとっても影響を受けた年度であった。震災を機にボラセンの体制は目まぐるしく変化した。職員の方たちは被災地に向かうことになり、ボラセンは被災地入りを希望する学生たちでごった返した。普段なら新入生や白金校舎に移ってきた学生たちを勧誘するはずの時期にも、誰も私たちのことは見えていなかっただろう。とにかくボラセンに限らず日本全国が震災一色であった。

私たちがこれまでやってきたことの重要性は、震災があろうとなかろうと変わらない。だから私たちは前へ進むことを諦めなかった。「いつもと違う」ボラセンの中で、「いつも通り」を求め続けた。私たちが地域にネットワークを構築し続けるのは、このような不測の事態にこそ「つながり」が意味を発揮すると思うからだ。とはいえ活動を続けるにあたっては、筆者をはじめ、PJの中心であるスタッフらに不安や迷いが常につきまとった。今まで、まさに二人三脚という言葉がぴったりあてはまるようにボラセンと協働してきた私たちにとって、初めて本当の意味での「じりつ（自立・自律）」が求められる状況であった。そこで、活動の中心となる3年生は頻繁にボラセンを訪れて情報共有を行い、これまで以上のチームワークを発揮して目の前のイベントをひとつひとつこなしていった。昨年に続いてコラボ企画も行い、成功をおさめた。「私たちには頼もしい仲間がいる」ということが活動のモチベーションに繋がっていた。

私たちを悩ませたのは震災だけではない。「次世代の学生スタッフの確保と育成」も今年度最大の問題であった。現在学生スタッフは、主に3・4年生で構成されており、横浜校舎に通う1・2年生のメンバーはごくわずかである。PJの代表は一様に「次世代」へのバトンタッチができないことに悩んでいた。しかし、勧誘しようにも説明会のようなイベントを行うには時間も人手も足りず、それよりも普段通りの活動のひとつひとつに1・2年生と絡める機会を数多く作った方がよいということになった。実質私たちはいつもどおり、やるべきことをやり、やりたいことを実現させてきた。ありがたいことに、それに強く共感してくれた1・2年生もいたが、4年間横浜校舎で学ぶ国際学部の学生だったため、やはりここにも校地の問題が立ち上がった。

今年度のスタッフの活動において特に革新的だったことは、情報共有用非公開ブログ「シェアノート」

を開設したことだと思う。これは、研修会の感想をシェアするために作ったものだったが、今では様々な機能している。シェアノートに記録する利点は、「携帯メールで送るには長すぎる文章」も「記録することができ」、非公開のため「本音を語ることができ」「いつでも読み返すことができる」ことである。シェアノートを開設した9月22日から12月19日までに、書かれた記事は51件に及んだ。これまで使用してきたメーリングリストはシンプルな内容のメールにとどめ、残しておきたい情報や議事録、各PJの進行状況等はシェアノートに記録、さらに共有したいファイルはPCのメールボックスに貯めていく…と使い分けてそれぞれの長所を生かす情報共有ができたと感じる。白金合コン2011は、白金と横浜の両校地のスタッフが担当したため、シェアノートの機能が存分に発揮されたと思う。また、次世代という問題を未だ抱えているため、未来の学生スタッフにも、現在の私たちの活動を知ってもらうのにいずれ役立つだろう。

さて、縁の下の力持ちの的存在のチーフが、これほど先頭に立たなければならなかった年というのも珍しい。学生スタッフ会議の取りまとめや、初めてボラセンを訪れる人への説明、震災関係で活動している学生の相談に乗ったりと、戸惑いながらも例年ない初めてのことを沢山経験した。チーフとして行ったことで最も心に残っているのは、東北学院大学へ手紙を送ったことである。これこそ、私たちにしかできない、いかにも私たちらしい活動の一つだったのではないかと思う。東北学院大学は、震災直後にボランティアステーションが開設されたのだが、先方からの要請もあり、白金学生スタッフの運営方法や内容を書いた手紙をお渡しすることになった。これまで、学生スタッフについて色々な人に対して説明してきたが、そのどれもが「自分の言葉」で「わかりやすく」伝えられたとは思えなかった。しかし、今回は違った。学生スタッフとして仲間と創ってきた活動に対する愛情を込めて、自分の言葉で説明出来たような気がした。嬉しいことに、東北学院大学ボランティアステーションのHPに載せて頂いたり、MG naturalの学生スタッフのページに一部掲載されたり、ボラセン内でも広く色々な方に読んで頂くなど、様々な活用してもらえ代物となった。

#### 【今後の展望】

やはり重要な課題となるのが「次世代の学生スタッフの確保と育成」であろう。3年生は、この12月から本格的に就職活動に入り、それでもなお今まで通りPJを運営しているが、それもいつかは限界が来るかも知れない。

しかし、校舎の問題もあり、「次世代」の課題は学生の努力ではどうにもならないところがある。それよりも、「人事を尽くして天命を待つ」。私たちは私たちにできるやり方で「細く長く」魅力ある活動を続けていく努力をし、今まで作られてきた愛すべき「つながり」を大切にしていけることを第一に考えていきたい。そして、学生スタッフとして活動できる最後の日まで、皆で夢を語り、叶え続けていきたいと考えている。

(心理学部心理学科3年 櫻井仁美)

## [全体活動報告] 研修会

### 【はじめに】

研修会とは、学生スタッフが「人と人をつなぐ架け橋」としての役割を果たすために欠かせない、情報共有の場である。学期に一度行われ、他PJの状況を把握し、共に問題解決を図ったり、学生スタッフイベントの企画立案を行ったりしている。このような情報共有を通して、学生スタッフ同士のつながりを深め、活動活性化のための協力態勢を築くことも、研修会の大きな目的である。9月は合宿、2月は日帰りの形態で行う。なお、本稿執筆時は2月の研修会前であるため、9月の合宿について報告する。

### 【2011年度9月研修会（以下合宿）】

2011年9月20日から22日まで、川崎市民プラザにて行われ、10名の学生スタッフと1名のPJメンバーが参加した。昨年同様、合宿のタイムスケジュールやメンバーの自己紹介シートを盛り込んだ「合宿のしおり」を制作・配布し、交流の活性化に利用してもらえるようにした。今回の合宿は、「次世代学生スタッフの確保と育成」が最大のテーマであった。チーフ報告（63ページ参照）で述べたように、今年度はどのPJも学生スタッフ全体としても、2年生以下のメンバーが不足しているという問題を抱えていたため、秋学期以降の活動でどう解決していくべきかを議論した。この合宿も、PJメンバーや、横浜校舎に通う学生に対して参加を呼び掛け、白金学生スタッフについて知ってもらう機会の1つとなるように企画していた。

1日目のコンテンツは、俳句ワークショップ（以下句会 72ページ参照）、チーフ報告、ワーク「東日本大震災とボランティア」であった。句会は、参加者の交流を円滑にするためのアイスブレイクとして行った。これは、MG☆SUZUが句会を秋学期の活動の軸にしたいと考えていたため、学生スタッフに実際に体験してもらうことで、率直な意見や感想、改善点を挙げてもらいたいと考え、行った。参加したスタッフからは、「俳句の制作時間の過ごし方や詠む句の数などの自由度を高めた方がよい」「知っている人同士で行うなら、写真は本人が写っていないものがよい」などの改善点が指摘された他、「この句会をやることによって、写真の思い出に、新たに思い出が付け加えられるみたいで嬉しい」「1枚の写真も人によって見方がこんなに違う。面白い」などの感想が挙がった。次に、学生スタッフチーフである筆者が、学生スタッフ全体の春学期の活動とその課題について総括した。本合宿にて「次世代学生スタッフの確保と育成」を目標として活動計画を練る旨を確認した上で、白金・横浜両校地の学生スタッフである大西康友が合宿前に白金学生スタッフに持ちかけた考え（63ページ参照）を改めて共有した。この話し合いを通じて大西自身が「出会いが無いことで活動の幅や多様性を広げられない学生や団体がいるのはもったいない。人と人を繋げ、その繋がりから生まれる様々な可能性を、実現する手助けがし

たい」という己の「やりたいこと」を明確化できたことによって、新たに「大西屋」というPJを立ち上げるに至った。ワーク「東日本大震災とボランティア」は2グループに分かれてKJ法でディスカッションを行い、最後に全体で共有した。両グループとも活発な議論が見られ、それぞれが震災以降感じていた疑問や思いを吐きだせる場となった。その議論では「ボランティア＝瓦礫撤去・募金」のように画一的なイメージにとらわれたボランティアの在り方に疑問を抱くメンバーも多く、「私たちは多様性のひとつでありたい」という強い認識を共有することができた。

2日目は、4PJの代表と学生スタッフ全体としてチーフがプレゼンテーションを行った。PJの数は吸収・合併により減ったものの、各PJの活動としては年々濃くなっていることを考慮し、1PJにつき70分間という枠内での発表となった。それぞれに春学期の活動・秋学期の展望をプレゼンし、ワークを通して問題点の改善案や企画でのアイデアを募った。共通して見られた動きとしては「PJの良さ（独自性）」を見つめ直す良い機会となったこと。また、秋学期以降のPJの活動ひとつひとつに「次世代」を意識し1・2年生を巻き込んでいこうということであった。学生スタッフの発表では、合宿で予定されていた卒業生による講演が、悪天候により中止となってしまったため、秋学期中に「学生スタッフ勉強会」（64ページ参照）を行なうという新しい企画が持ち上がった。

3日目は秋学期の恒例行事「白金合コン2011」（80ページ参照）の企画立案を行なった。「地域の人と学生が出会うだけでなく、学生がキューピット（繋ぎ役）となって、地域の方同士の良き出会いの場になるように」という思いを込めて「恋をしましょう」というテーマが決定した。合宿1日目に誕生した「大西屋」の活動目標が、合コンの目的と合致していたため、大西が運営の中枢を担うこととなり、他2名の学生スタッフがサポートする形を整えた。また、合宿からの帰り道、例年コーディネーターを介して紙媒体で共有していた合宿の振り返りを、今回の合宿を機に非公開Blog「シェアノート」を開設し、Web上での情報共有を試みることとなった。

#### 【合宿を振り返って】

今回の合宿を一言で表すと「希望」であったと思う。他の報告でも述べているように、震災以降、学生スタッフは「いつもと違う」春学期を過ごしてきた。学生自身の力が試される場面が多かった中、各PJの代表を務めたスタッフは、色々なことを抱えすぎていた感がある。それを、この3日間で確実にリセットしてくれたと思う。焦りと緊張で固くなっていたスタッフがよい意味で脱力できた。また、そんな環境下でも、「いつも通り」の活動を諦めず、意外にも例年と同じくらい沢山のことを成し得たのだということに気が付いた。そして、自分の周りには「語り合える」「労（ねぎら）い合える」「刺激し合える」仲間がいることを改めて実感することができ、秋学期に向けてエネルギーを充填することのできた実り多き合宿であったと思う。

（心理学部心理学科3年 櫻井仁美）

## [全体活動報告] 白金地域での活動 ふれあい運動会

### 【はじめに】

ふれあい運動会とは、毎年4月29日に明治学院大学白金校舎の隣にある港区立白金小学校を会場に開かれる地域の運動会である。今年（2011年）で27回目を迎える伝統ある運動会であり、地域の子どもから大人まで誰もが参加することができる。開催にあたっては、ふれあい運動会実行委員会のもとで、地域の方々や小学校の先生方々が協力し合って運営がされている。私たち明治学院大学の学生も毎年、事前の運営に関するミーティングの段階から参加し、当日はボランティアとして実際に運営に携わっている。

### 【活動報告】

ふれあい運動会当日は天候にも恵まれ、青空のもとで明るく元気な子どもたちが一生懸命、楽しそうに競技を行っていた。また子どもだけでなく、地域の方々同士のコミュニケーションもはずみ、終始にぎやかな雰囲気で行われた。今年は578人と多くの参加者で会場があふれ、また、多くの明治学院大学の学生もボランティアとして参加した。

今年は3月11日の東日本大震災の影響で、一時は開催が危ぶまれたと伺った。4月ということもあり、震災被災者の多くの方が都内に避難をされ、自粛のムードがある中、このようなイベントを実施しても良いのだろうか、実施にあたっては葛藤があったようだ。しかし、大震災を目の当たりにし、地域の結束力や住民同士の顔と顔の見える関係の重要性を再確認し、今年も開催することになった。このような経緯から、今年の運動会のテーマは「いまこそふれあい」となった。

私たち学生ボランティアが主に担当したことは、ラジオ体操と各競技の運営補助であった。ラジオ体操は子どもたちのお手本として前で行い、その他にも、綱引きやパン食い競走、盆踊りなどに参加した。学生ボランティア全員が子どもたちや地域の方々とふれあう、有意義で楽しい時間を過ごすことができた。

### 【反省・課題】

今年は、震災の影響で大学の春休みが4月いっぱい延長となり、学生ボランティアの募集が学生ポータルサイトのみでしかできなかったため、人が集まるか不安であったが、逆に春休みが延長されたからこそ何かしたい！と思って参加をしてくれたやる気の満ちあふれた学生が多かった。中には、運動会前日、ボランティアセンターに何かボランティアはありませんかと訪ねて参加をしてくれた新生人もいた。来年も伝統ある運動会を通じて築かれた地域との繋がりを大切に、大学と地域とのつながりをさらに深めていきたい。このようなすばらし運動会をさらに盛り上げるためにも、学生に向けて白金地域の魅力を発信し、興味を持った多くの学生が参加をしてくれるように工夫をしていかなければならないと感じた。

(社会学部社会福祉学科 4年 小川真由)

## 港区青少年対策高松地区委員会

### 【はじめに】

港区青少年対策高松地区委員会（以下高松地区委員会）とは、「地域の子どもは、地域ぐるみで育てる」というスローガンを合言葉としている、自主的な地区組織活動団体である。今まで、高松地区委員会の活動は、ボランティアセンターを通して学生ボランティアの募集が行われていた。しかし、今年より、ただイベントに参加するだけでなく、私たち白金ボランティアセンター学生スタッフ（以下学生スタッフ）が積極的に企画段階から関わり、高松地区委員会と協働して活動していくこととなった。主なイベントは、港区の小学生を引率してキャンプに行く「みなとキャンプ村」、ハイキングをしていちごを食べる「三浦半島ハイキングといちご狩り」などがある。

### 【活動報告】

#### （1）三浦半島ハイキングといちご狩り

[概要] 2011年2月5日（土）、高松地区委員会の主催で、三浦富士をハイキングし、そのあといちご園にていちご狩りを行った。参加者は、高輪地域に住む小学生、学生スタッフ、学生ボランティア、地区委員の方、数名の保護者であった。学生スタッフと学生ボランティアは、引率リーダーとして参加した。また、当日までの学生スタッフの役割としては、①地区委員会の方との話し合い・下見への参加、②バスでの移動中のレクリエーションの企画、③学生リーダーの取りまとめの3点であった。バスレクリエーションは、小学校低学年の参加者が多かったことから、なぞなぞ・クイズ、カラオケ、DVD鑑賞などを行った。

#### （2）みなとキャンプ村

[概要] 港区教育委員会と港区地区委員会の共催で各地区ごとに募集を行った。高松地区からの参加者は高輪地域に住む小学生・中学生、学生スタッフ、学生ボランティア（明治学院大学生と他大学生）、地区委員の方々であった。8月7～9日の3日間で、内容は川遊びやカレー作り、スイカ割り、花火大会など盛りだくさんとなっていた。学生スタッフの役割は前回のいちご狩りと同様であった（上記記載）。

### 【活動を振り返って】

今年から学生スタッフが企画段階から高松地区委員会と関わったことから、学内の学生リーダーに対して、事前の顔合わせ会や、地区委員との話し合いへの参加を呼び掛けることが出来た。このように、予め結束を深めたことで、イベント当日も協力して運営に関わることが出来た。また、参加している小学生と学生リーダーと一緒に遊ぶことはもちろん、子どもがやってみたいといったこと（火起こしや薪割りなど）に対して、危険がないように温かく見守る姿も見受けられた。来年度は、子どもに一番近い引率リーダーという立場を生かして、高松地区委員会と一緒により楽しめるイベントを創り上げていきたいと思う。

（心理学部心理学科3年 山本奈穂）

## [プロジェクト報告] MG パール

### 【はじめに】

私たち MG パールは東南アジアのボルネオ島という、生物多様性の宝庫と呼ばれる島で深刻化する森林伐採や、日本人が大量に消費するパームオイルの原料となるアブラヤシのプランテーション開発によって棲み処を奪われた野生動物たちの保全活動に関わる活動をしている。活動は NPO 法人ボルネオ保全トラストジャパン（以下 BCT）と、明治学院大学ボランティアセンターとの三者協働で行っており、学生はボルネオの淡水パールで作ったアクセサリーを生産、販売し、売り上げの半分を森林保全のための資金として、現地へ BCT を通し寄付している。またイベントの参加、企画を通しアクセサリー販売をするとともに、啓発活動を行っている。

### 【2011 年度 月別活動報告】

月	主な活動内容
5月	・ ボランティア団体合同説明会へ参加@横浜校舎 ・ 上野動物園見学ツアー開催（BCT ジャパン会員の皆さんとともに）
7月	・ 岐阜県郡上八幡の観光案内所に MG パール販売所が OPEN ・ MG パールのブログ「オランウータンと私たちの未来のために」が OPEN (HP : <a href="http://ameblo.jp/mgpearl/">http://ameblo.jp/mgpearl/</a> )
8月	・ PROPRI GIOIELL ジュエリーデザイナー、松本さんとのアクセサリー制作会 ・ 白金校舎近く在住の造形作家、山下さんとの交流会 ・ 国際ソロプチミスト 日本東リジョン 東京一弥生 20周年式典へ参加
9月	・ 2011 年度ボルネオスタディツアー ・ ぱれっとサロン（NPO 法人ぱれっと“スリランカ料理& BEER Palette”）での発表
10月	・ アクセサリーの台紙をリニューアル ・ 金沢文庫芸術祭 1DAY イベントに、BCT ジャパン会員の方と共同出店 ・ 国際ソロプチミスト東京一弥生 認証会へ参加・助成金の受け取り
11月	・ 学内イベント「1 Day for Others」の一環としてアクセサリー制作会を開催 ・ 明治学院大学横浜校舎生協購買部に期間限定で MG パールショップが OPEN
12月	・ 白金合コン 2011 への出店 ・ ボルネオスタディツアー 2011 報告会への参加と協力@横浜校舎、白金校舎

### 【活動報告】

今年は例年に比べ販売機会こそ少なかったが、それ以上に今後の活動の幅を広げるに当たり重要な土

台を築くことができた年であった。具体的には、今後の活動を引き継ぐ新しいメンバーの加入、そしてアクセサリーのデザインやブログ開設といったコンテンツの充実などだ。また今年度も昨年度に引き続きボルネオスタディーツアーを実施することができた。ツアーには7名の学生が集まった。去年に比べ野生のボルネオゾウをはじめとし多くの動物を見ることができたようだ。また現地の方と新聞紙を使ったコサージュ制作やパールアクセサリーの制作を行ったが、とても簡単に作ることができたので、非常に好評だった。そして本年度の活動で特筆すべき点は多分野の方々と交流を持つことができたことだ。このことは、環境問題について様々な立場から考えるきっかけを作りだし、活動を多方面で行う上で非常に重要なコネクションを作ることができたといえるだろう。

また、パールアクセサリーについても本年度は大きな変更があった。従来よりも製品のデザインが増え、製品ラインもイヤリング、ピアス、ストラップに加え、ネックレスやブレスレットも追加した。また、販売の際に製品をディスプレイする台紙も大きくデザインを変更し、よりアクセサリーが目立つ、製品のコンセプトが伝わりやすいようなオランウータンをデザインしたものとなった。

#### 【成果と今後の方針】

2011年12月末日現在でのアクセサリーの売り上げは68,200円であった。本年度はうち半分の34,100円をアクセサリー売上の寄付金とし、ここに募金額である12,831円を加え、豊約234枚分の森林面積に相当する46,931円を本年度の寄付金としてBCTへ寄付することができた。また、2011年度から交流が始まったソロプチミストからは、活動の助成金として年間5万円を頂けることとなった。

2012年度からの活動目標は、今年度できたつながりを活用して、さらにMGパールの活動域を広げていくことである。パールアクセサリーだけでなく、トートバックなどの他製品を作っていく、商品の販売機会と常設する販売所を今後増やしていけるよう活動していきたい。また商品の制作、販売だけでなく子どもや他大学と合同で環境教育イベントを多く行いたい。2012年2月には、神奈川大学の学生にボルネオの現状や私たちの活動についての講演会を行う予定である。今後もこのような活動を通しボルネオの現状やMGパールについてさらに理解してもらえるような活動をしていきたい。

#### 【終わりに】

2011年度は、3月の東日本大震災の発生で日本中が自粛ムード漂い、「東北救済」一色に染まった。そんな中、MGパールのボルネオという聞きなれない土地の環境保全という活動内容には誰も目を向けず、活動しづらい雰囲気さえ感じていた。しかしこのボルネオの問題も私たちの生活と決して無関係ではないとこの震災が気づかせてくれたのも事実である。皮肉にも今回の原子力発電所の事故で私たちは「いつかダメになる」とわかっていながら「まだ大丈夫だろう」と使い続けることにどんな未来が待っているか、いかに自分たちの生活が自分たちの知らないものによって支えられているかに気づかされた。だからこそ、いま私たちが取り組んでいるこの活動に対してふれず、真剣に取り組んでいきたいと思う。

(経済学部経営学科3年 油谷渚)

## [プロジェクト報告] MG ☆ SUZU

### 【MG ☆ SUZU とは】

MG ☆ SUZU（以下SUZU）は、「アートでキャッチボール」をコンセプトに特別養護老人ホームの利用者さんとアート作品の製作を通じた交流を行っている。現在、白金校舎から徒歩15分の場所にある港区立特別養護老人ホーム白金の森（以下白金の森）という施設を中心に活動している。私たちはアートをひとつのコミュニケーションツールと考え、そこから生まれる会話やつながりを大切にしている。出来上がった作品からは、その方の人柄やこだわりが感じられ、私たちがより深く利用者さんを理解することにつながっている。SUZUの活動を利用者さんに楽しんで頂き、利用者さんのご家族、施設職員の皆さんにとっても利用者さんの新たな魅力を発見する手助けになれば幸いである。また広く一般の方々にも利用者さんの魅力あふれる作品を観て頂きたいと考え展示会も行っている。

### 【2011年度までの流れ】

3月25日、白金の森が3月に運営法人が入れ替わる関係で、旧法人の方へのお礼と新法人の方へのご挨拶のために伺った。新法人の方とは、これまでのMG ☆ SUZUの活動や今後の活動の方針などをご説明し、今までと変わらぬお付き合いをさせて頂けることとなった。旧法人の方からは、思いがけず感謝状を賜り、表彰式までして頂いた。同月29日には、昨年の白金アートミュージアムでもお世話になったNPO法人風の子会（以下風の子会）を訪問した。その場には、風の子会の会長で俳人の、花田春兆さんも出席され、風の子会の職員さんと一緒に、今後の関わりについて話し合いを行った。結果、「東日本大震災が起き、日本全体が自粛ムード一色になっている今だからこそ「笑顔」を求めて行こうではないか」ということで「笑顔プロジェクト」が発足した。これは、風の子会を中心として、他の学生チームをも巻き込むコラボレーションによって活動の多様性を広げるとともに、長期的な震災支援も視野に入れた「笑顔」を目指す活動を共に模索していくものである。

### 【2011年度の活動】

春学期は、中心的な活動先である白金の森が法人の入れ替えによって多忙だったこともあり、これまでのようなアートの活動が出来なかった。そこで、前年度行なった白金アートミュージアム（以下展示会）のパンフレット作りや、「笑顔プロジェクト」の一環である、白金でまったり過ごす会（以下まったり会）の企画・参加などを中心に、出来る限り活動を続けた。まったり会はMG ☆ SUZUと山黒（78ページ参照）のコラボ企画である。もとは山黒が前年度から行ってきたイベントであるが、今回団体間の交流を目指して、SUZUと風の子会も一緒に参加した。第1部のコラージュアートをSUZUが企画し、第2部の茶話会を山黒が企画した。8月には、日本学術振興会特別研究員の荒井裕樹さんのご紹介で、精神病院である平川病院に見学に行った。院内では、小さなアトリエで造形教室が行われ、通院している患者さんたちが心の声をアート（表現）する場となっていた。秋学期は、俳句ワー

クシヨップ（以下句会）を活動の軸としていくこととなった。句会は、誰かの思い出の写真に別の誰かが俳句をつけ、お互いのエピソードを交換することで「アートでキャッチボール」できるワークである。準備として、SUZUで1回、9月の学生スタッフ研修会で1回、句会を行い、改善点を挙げてもらった。それをもとに変化形を編み出し、各施設を訪問して行う句会、出張☆俳句ワークシヨップを行ったり、学内で一般の方向けに行うなど、様々な方との「コラボ」を試みた。10月は、8・9日に行われた、みなと区民まつりに風の子会と一緒に参加した。また、前述の荒井さんが関わっていらっしゃる東京都精神病院協会主催「第3回心のアート展」を観覧し、27日には春兆さんの展示会をお手伝いに行くなど、昨年から続けてきた「アートの勉強」を積極的に行った。12月1日からは昨年同様本学パレットゾーンで展示会が行われ、句会で生まれた写真と俳句の「コラボ」作品を展示することができた。そして、今年度最大の「コラボ」といえば、平成23年度内閣府「障害者週間行事」として実施された、連続セミナーへの参加である。本学アートホールを会場とし、社会学部社会福祉学科主催で行ったこのイベントでは、SUZUを発足当初から見守って下さっていた茨木尚子先生が進行を務められ、「…だからできることーアートでつながる人と人」というテーマで、荒井さん、白金コーディネーターの李さん、春兆さん、『困ってるひと』の著者でいらっしゃる大野更紗さんが登壇した。SUZUは「学生だからできること」というテーマで発表をさせて頂き、さらには会場で句会をさせて頂いた。嬉しいことに、後日月刊「ノーマライゼーション」2012年4月号（日本障害者リハビリテーション協会発行）に当セミナーとMG☆SUZUについて原稿を書かせて頂けることとなった。そして12月9日の白金合コンでも、最大規模の俳句ワークシヨップを行うなど、句会三昧の秋学期であった。

#### 【成果と課題】

今年度は沢山の「コラボ」が実現できた。しかも、メンバー全員が3年生以上という状況で、私たちがなりのやり方で精いっぱい活動を継続でき、非常に「濃い」1年を過ごせたことは最大の成果である。また、これまで関わりを持たせて頂いた高齢者の方々だけでなく、障害を持った方々との関わりを多く持つことが出来たのも特徴的である。まったり会をはじめ、句会などでも、「高齢」や「障害」、「健常」という枠を捨て去って、その場にいる全員が「ひとりの人として」尊重されるような素敵な場に居合わせたことが、本当に幸せであった。障害者週間連続セミナーで、茨木先生や春兆さん、荒井さんなど、ゆかりの方々との夢のコラボをさせて頂いたことには、この場を借りて改めて感謝申し上げたい。

課題としては、展示会パンフレットの制作が予定通りにいかず遅れてしまったこと、句会のスケジュールと展示会の準備がギリギリになってしまったことなどが挙げられる。他には、笑顔プロジェクトを活かした活動があまり出来なかったのが、今後新しい活動を考えていきたい。次世代のメンバーがいないうことへの不安は残るが、今後も粘り強く取り組み続けたい。

（心理学部心理学科3年 櫻井仁美）

## [プロジェクト報告] MG natural

### 【MG natural とは】

『MG natural』（以下 natural）は、白金校舎学生スタッフが制作しているボランティア情報誌である。「ボランティアを“自然”なことにするために」、「ボランティア活動にかける思いを“ナチュラル”に伝えたい」、「学生に愛され、“自然”と手に取ってもらえるフリーペーパーを作りたい」という思いから『MG natural』と名付けられた。ボランティアを明学生に広めること、そして人と人、他団体との繋がりをつくることをミッションとして学期に1回発行している。

### 【2011年度活動報告】

今年度の活動方針を決定する前年度2月の研修会にて、MG natural はプロジェクト（以下PJ）としての位置づけをなくし、活動の内容はそのままに「学生スタッフの活動」として引き継がれた。前年度の最大の課題は、natural が学生スタッフの活動全般を記事として取り上げているにも関わらず、作成できる技術を持ったメンバーが極端に少なく、負担が偏りすぎていたことであった。そのため、負担を分散し、学生スタッフ全員が作成ソフトである In Design 技術を習得することを目指して、「学生スタッフの活動」とした。また、全員で完全に分担して紙面を作成すると、冊子全体の統一感が損なわれるおそれがあったため、編集長として筆者（チーフ）が取りまとめ、デザインの統一や仕事分担などを行い、他2名のスタッフがそのサポートにつくこととなった。

2011年9月に『MG natural 第6号 春の特大号』が発行された。第6号作成の目的は以下の3点であった。

- (1) 学生スタッフ全員に関わりのある内容にし、In Design の習得を図る。
- (2) 誰にでも分かりやすく学生スタッフと各PJ、ボランティアセンターのしくみを説明し、様々な場面で配布できるチラシとして活用する。
- (3) 「紙面版 白金合コン」として、学生だけでなく、つながりのある外部団体も紹介し、学内外で広く読んで頂けるものにする。

これらを実現するため、第6号を全20ページの特大号とし、通常の連載記事「輝く☆明学生」に加え、各PJと外部団体の紹介、学生スタッフと白金ボラセンの紹介、現在の学生スタッフの基礎を築いた卒業生の記事を盛り込んだ。「輝く☆明学生」のコーナーは、ボランティア活動で活躍している明学生へのインタビューをまとめたものである。これまでは毎号1名にスポットを当てて行ってきたが、今回は特大号にふさわしく、2名の学生にインタビューすることにした。外部団体の紹介は各団体に、白金ボラセンの紹介はコーディネーターの李さんに、それぞれ寄稿をお願いした。卒業生に執筆してもらうコーナーでは、「私とボラセン」というタイトルで、主に「学生時代に行ってきたこと・学んだこと」と、「社会人にな

った今生かされていること」について、2名の卒業生に寄稿してもらった。

### 【成果と課題】

春学期いっぱい時間と手間をかけて作成した甲斐があって、沢山の成果を感じることができた。PJの紹介だけに留まらず、関係団体の方々や学生スタッフの卒業生にも寄稿して頂けたおかげで、かなり読み応えのある内容になったと思う。

各PJが分担して作成した特集ページ（各PJの紹介）も、あらかじめデザインを統一していたことにより、個性を出しつつもまとまりのある冊子に仕上がった。また、秋学期の各種イベントに配布資料として持っていく、毎回チラシを作成する必要もなくなった。そして、主に編集に関わった学生スタッフ3名をはじめ、確実にIn Design技術が上達したことも大きな成果といえる。今では、イベントのポスター作り等にもIn Designが役立てられている。

課題は、発行までのスケジュールが大幅に遅れたことである。これだけ多くのスタッフ関わって作成するのは初めての試みであったし、特に、外部の方にも寄稿を依頼したこともあって、様々な事情でメ切が厳密に守られなかった。今後は、それらを踏まえてスタッフが動き、意識的に発行スケジュールを確認する必要がある。また、技術的なところももう少し研究が必要であろう。特に記事に挿入した画像の解像度は、発行済のものを見ても良いとは言えない。このような点を改善し、In Designを使える学生スタッフをさらに増やしていきたい。

### 【今後の展望】

2011年10月より、次号のnatural作成にとりかかり、2012年2月中旬の発行を目指している。第7号は次世代の学生スタッフを意識し、横浜校舎に通う1・2年生向けのコンテンツを含む全8ページのnaturalとなる。MG naturalを手にとった横浜校舎の学生が、白金学生スタッフの活動にも興味を持ってくれるよう、魅力ある冊子をこれからも作っていききたい。そして、作るからには単なる自己満足ではなく、今回の第6号のように、様々な人にとってメリットのあるコンテンツを考えていきたい。naturalが「人と人とを繋ぐ」ひとつのツールとなることを願っている。



(心理学部心理学科3年 櫻井仁美)

## 【プロジェクト報告】 COS 【Circle of Shirokanaise】

COSとは、“Circle Of Shirokanaise”の略で、明治学院大学のある白金という地域に根ざしたエコ活動を行っており「ゆるく・楽しく・かっこよく」大学周辺の清掃等をしている。気軽にできる活動を通して参加した学生同士のつながりを作ることが目的である。主な活動内容は大学周辺の清掃活動、ペットボトルキャップの回収、COS blogの更新の3つである。（各内容の詳細は2009年度報告書28ページを参照）。

### 【活動報告】

#### 1) 春学期（前期）

震災の影響により学暦が変更され、5月からの活動となったが清掃活動は5月以降月に2～4回ずつ安定して行うことができた。昨年末より取り入れたリーダー制がうまく機能した結果といえる（2010年度報告書40ページを参照）。しかし、参加者が少なく、清掃を実行できない日もあった。実行できた日も毎回2～4人での小規模な活動だったことに加え、新規参加者もほとんど来ず、新メンバーは1人も増えないという状況であった。6月末に学生プロジェクトの見直しが行われ、地域活動を行う「しろかねサラダ」活動の一部をCOSが吸収することとなった。具体的にはしろかねサラダが発行するDeep Map（Deep Mapについては2010年度報告書82・83ページを参照）の第3号の企画である。Deep Map調査隊と称して、日頃から地域活動でお世話になっている白金住民の方に白金の面白い場所を案内していただき、たくさんの興味深いテーマを見つけることができた。それらの中から第3号のテーマを「昔の白金」に決定し、大学周辺の昔の写真と同じ場所の現在の写真を地図上に並べ、昔の白金の雰囲気を知ってもらおうと同時に白金地域に建つ歴史ある建物について特集を組み、特にその建物にかかわった人物を紹介する構成とした。完成までほぼ1カ月という短いタイムリミットがあったが、他のプロジェクトの学生スタッフとも協力しながら8月の中旬に無事完成させることができた。

#### 1) 秋学期（後期）

秋学期は通常のコス活動の回数は少なかったものの、諸イベントへ参加したり、いつもとは趣向の違った活動をしたりするなど、「目立つ」活動を展開することができた。10月の中旬頃、春学期に取り組んだDeep Mapの完成を記念して、清掃をしながらMapの制作でお世話になった方や取材先の方へ、完成の報告とお礼を伝える機会を設けた。その数日後には港区リサイクル事業協同組合の方に来ていただき、たまっていたペットボトルキャップを回収していただいた。回収したキャップの正確な重量は報告待ちの状態であるが前回の回収（2010年8月）からこの日までに48リットルゴミ袋で20袋以上のキャップを集めることができた。

11月には本学の学園祭である白金祭で清掃を行ったり、昨年度に引き続き、港区総合支所主催の「高輪文化財周辺クリーンキャンペーン」に参加したりした。また31日のハロウィンには「仮装COS」を行った。文字通り「仮装してCOSをする」だけであるが、各自思い思いの衣装を身につけて10名とい

う大所帯での活動となった。いつもはあまり目立たず少人数でひっそりとしがちな活動であるが今回は多くの人の視線を集め、声をかけられることも比較的多かったと感じた。

また今期はペットボトルキャップ回収ボックス（以下ボックス）の装飾にも力を入れた。ハロウィンやクリスマスに合わせた帽子をかぶせるなどした結果、学生や職員の目に留まり、ボックスの前で立ち止まる人が増えたように感じた。ブログではボックスの名前を募集し、2012年1月現在いくつかの候補が集まっている。年明けに決定する予定である。こうした活動が本学職員の目にとまり、Facebookのページに写真を載せていただくことができた。これらの取り組みの成果か、キャップの回収量が以前よりも多くなっている。

#### 【成果と課題】

Deep Map の制作にあたり、地域の方々には面白い場所の紹介や貴重な写真の提供などを通して、本学記念館の職員の方には文章の添削や資料提供などを通して大変お世話になった。完成した Map は取材先にも置いていただけるなど今後につながる関係が築けたと思う。同時に、編集をする上で多くの学生スタッフにも力を借りた。Map の制作を通して、昨年目標としていた「学生スタッフの横のつながり」もより強固なものになったと思う。また清掃活動では、季節に合わせたイベントライクな日には人が集まりやすく、人目を引くことが宣伝になることもわかったので、今後の活動のポイントとしていきたい。

課題としては、春学期にブログの更新を怠ってしまいタイムリーな記事が書けなかったことと、運営側の人手不足が挙げられる。今後活動していくための、新しいやり方や人材確保のための取り組みが必要である。

#### 【今後の展望】

この3月でメンバーのほとんどが卒業し、少なくともリーダー制を続けていくことは不可能と思われる。しかし、この状況でも継続していける活動を模索し、「細く長く」でも活動は続けていきたい。前述のボックスの装飾により、キャップ回収活動に対する学内の認知は高まっていると思う。この活動を通して、本業である清掃活動にも目を向けてもらえるような工夫をしていきたいと考えている。また人材確保についても、人手不足の要因といえる「3・4年生が中心の白金校舎」ということをマイナスにとらえず、またボランティアセンターがキャリアセンターの向かい側に位置していることも利用し、COSの活動を就職活動の情報交換や、息抜きの場として打ち出したりしてプラスにとらえていきたいと思う。参加してもらうきっかけ作りの一つとしても、季節に合わせたイベントは継続していきたい。活動に関して「続けられない」「人がいない」と考えがちであるが、COSのモットーである“happy cycle,happy circle”、幸せのわ（輪・環・和）を広げていくという目的を見失わないようにしたい。筆者も含め、参加した人が少しでも「楽しい、また参加したい」、と感じられるような雰囲気作りに努めていきたい。

(心理学部心理学科3年 佐藤ゆり)

## [プロジェクト報告] 山黒

### 【はじめに】

山黒とは、障がい者支援団体に関わる学生同士のネットワークを構築するために2010年7月にNPO法人ばれっと・NPO法人つばさ支援グループ・NPO法人トータルヒューマンネット21「レインボー白金」(以下レインボー白金)でボランティアをしている学生から発足したプロジェクトである。学内でこのようなネットワークを構築することによって、より多くの学生や地域を巻き込んだ企画や、各団体との関わりから得た事を活かした企画が立案・実施出来ると期待している。またそれによって、福祉に関心の薄い学生や地域住民をとり込み、地道な地域交流を通し、新たな人と人とのつながりを創出していくことを目指している。

### 【活動報告】

#### (1) 白金でまったり過ごす会

[概要] 7月23日(土)に、MG☆SUZU(72ページ参照)と共催という形で、明治学院大学白金キャンパスバレットゾーン階の半面を貸し切って開催した。参加者は、明学生、レインボー白金の利用者とスタッフ、MG☆SUZUと関わりのあるNPO法人風の子会(以下風の子会)の利用者とスタッフの総勢47名であった。イベントでは、6~7名の班を組み、ボールを使った自己紹介レク、「笑顔」がテーマのコラージュアート作り(雑誌の切り抜きや写真などを使用)、最後に全体で観賞会を兼ねた茶話会を行った。また山黒は、自己紹介レクと茶話会の企画担当として、準備を行った。

[成果と反省] MG☆SUZUと共催することで去年よりも、規模を拡大して開催することが出来た(昨年度参加者は30名)。また、風の子会や、今までに関わりのなかった学生の参加があり、新たな人と人の関わりを作ることが出来た。そして、企画はMG☆SUZUがコラージュアート、山黒がレクリエーションを担当した中で、それぞれの普段の活動の強みを生かすことが出来た。その他、山黒で週一回集まる機会を作って情報の共有をはかった。その結果、ハプニングはいくつかあったもののスムーズに進行でき、より楽しめるプログラム作りが出来た。

反省会では、車いすの参加者に対するサポートがうまくできなかったこと、当日までにMG☆SUZUと全体の情報共有の場が一回しかなかったことが挙げられた。今後よりよい活動を提供していくためにはプロジェクトリーダー間だけでなく全体の関わり合いを高めていくことが必要だと感じた。そして予め、当日の進行中に発生しうる問題を予想し、みんなが楽しめる環境づくりを行うことも大切な課題として残った。

#### (2) みんな de ごはん

[概要] 11月より、グループホーム・レインボー白金内で、月1~2回のペースで開催している。内容は、レインボー白金のキッチンをお借りして料理を作り、利用者・スタッフ・学生など様々な人を巻き込んで、みんなで楽しく食べるという活動である。きっかけは、学生がレインボー白金と楽しく関われない

かということで行った誕生日パーティーだった。また、レインボー白金も地域のコミュニティーハウスを作りたいという想いがあった。そこでまずはこの活動を定期的に行っていくことで、レインボー白金を地域のコミュニティーを育む場として活用していこうということになった。そして、第三回目からは活動名を「みんな de ごはん」とし、毎回リーダー（匠）を決め、匠を中心にその日のコンセプトやそれに合わせた調理を行うことになった。

第一回： 2011年11月11日	レインボー白金利用者の誕生日パーティー
第二回： 2011年11月23日	手巻き寿司パーティー
第三回： 2011年12月16日	みんな de ごはん～コリアンナイトイムニダ～ (匠：李永淑 白金ボランティアセンターコーディネーター)
第四回： 2012年1月27日	みんな de ごはん～新春ばあばの味～ (匠：武井蓉子 レインボー白金調理スタッフ)

[成果と反省] まだ実施回数的には少ないものの、学生、レインボー白金の利用者やスタッフが「作る」「食べる」を共に楽しむことでよりよい関係づくりが出来ていると感じる。また、たくさん的人数で食べることが面白く、笑いが絶えない。さらに、普段の生活でなかなか味わえない、大家族のようなあたたかい空間作りができていると思う。また、初めて参加する学生に対しても、「作る」「食べる」という活動であるため、参加を呼び掛けやすい。実際に参加してくれた学生からは初めてでも溶け込めて楽しかったという声が聞かれた。また、レインボー白金の利用者の皆さんからも「次回もやってくださいね。楽しみにしています。」という、声をいただいている。これは、学生との関わりを楽しんでくれているからであろう。今後の課題としては、地域の方々をどのようにとり込んでいくか、学内の広報などを活用して学生の参加者をどう増やしていくかがあげられる。レインボー白金はアットホームで、とても居心地がよくあたたかい環境である。その良さを明学生や地域の方々にも知ってもらい、匠を中心にバラエティーに富んだメニューを提供する中で、人と人の輪を広げていきたいと思う。

#### 【おわりに】

山黒は、去年参加したファッションショー「ばれ☆コレ2010」が終わってから、今後の活動の方向性が見えない状態であった。しかし、迷いながらも白金でまったり過ごす会や、レインボー白金との関わりを深めていくなど自分達に出来ることを積み重ねて行った結果、「みんな de ごはん」という新しい活動をスタートすることが出来た。今のメンバーは全員3年生であり、下級生のメンバーはいない。今後山黒がどうなっていくのかという多少の不安はあるが、山黒メンバーとは「自分達が後悔しないような活動を作っていこう」と話している。今まで通り、自分達に出来ることを積み重ね、楽しみながらこれからも活動していきたいと思う。その中での新たな出会いを多いに期待する。

(心理学部心理学科3年 山本奈穂)

## 【プロジェクト報告】 大西屋（白金合コン）

「大西屋」とは、9月の研修会（報告書66ページ参照）で新たに発足したプロジェクトである。これは、横浜校舎に在籍する筆者が繋ぎ役となって白金スタッフの活動と他のあらゆる団体、個人をつなげることで様々な「つながり」を生み出すという「情報屋兼コーディネート業」を柱とした活動である。この「つながり」を増やしていくことで自身やスタッフの活動の幅を広げ、よりおもしろく、充実したものにしていくことを目標にしている。この「大西屋」のメインプロジェクトとして今回、白金合コンを企画運営させていただき運びとなった。

### 【活動報告】

#### 1) 白金合コン2011～恋をしましょう～

##### ●白金合コンとは

地域の方々と白金学生スタッフ、ボランティアセンターをはじめとした本学教職員が一年の締めくくりの時期に集まり、相互に交流することで「つながり」を広げるための交流会である。普段の我々スタッフの活動はプロジェクト毎に活動しているため、プロジェクト間で協働して活動する場が少なく、それによって横のつながりが生まれにくい。そこで学生スタッフ全員で一つのイベントを企画・運営し、同時にお世話になっている個人・団体の皆様へ日頃の感謝を伝えあう場にするとともに、横の「つながり」を強くすることを目的として2009年度から開催してきた。

##### ●白金合コン2011～恋をしましょう～

まず、9月の研修会において白金合コン（以下合コン）の土台を話し合い、そこで提案されたテーマやアイデアをもとに企画していった。この研修会で今年のテーマは「恋をしましょう」に決まった。これは、仲間同士や団体同士が出会い、魅かれあえるような場を提供したいといったスタッフの思いを表現した言葉である。したがって今年は学生が「キューピット」となって招待者同士を結び付けられるような内容を考えていった。合コンのプログラムは第1部「俳句ワークショップ（以下句会）」、第2部「<sup>カレー</sup>華麗なる出会い（食事会）」の2部制とし、各所で参加者が知り合い、交流できるよう思考をこらした。そういった合コンの内容を決めると同時に招待状の作成・発送や小道具作りなどの事務作業もやらねばならず、非常に大変だった。しかし、白金と横浜で作業を分担した結果、なんとか開催までに作業を終えることができたのだと思う。

##### ●合コン当日

白金校舎横の明治学院高等学校の調理室を貸していただき、手の空いているスタッフで昼過ぎからカレーの調理を始めた。この調理室での作業がなかったら合コンは成り立っていなかったのも、調理室を快く貸していただいた明治学院高等学校の方々には深く感謝申し上げたい。合コンが始まるまでは、参加者同士知っている人もいれば初対面の人もおり、少し硬い雰囲気だったが、合コンが始まり句会を始めると徐々に皆にも笑顔が増え始めた。この句会とは、各自自分のエピソードの込められた写真を持ち

寄り、それをシャッフルし何も知らない第三者がその写真について自由に俳句を詠むというものである。順番に作者が句を披露した後、写真の持ち主がエピソードを紹介することで自然とコミュニケーションが生まれ、自己紹介もできるという、大変面白い企画であった。発表された句はストレートなものからユーモアのあるものまで様々で、参加者の方からも好評であった。この句会を行ったことで、一気に合コンの空気を和やかにすることができた。そしてトイレ休憩と簡単なミニゲームを挟み、第2部の食事会へと移った。ここでは各団体にマイクで簡単な自己紹介をしてもらい、全員に「どんな人が参加しているのか」を知ってもらうことができた。この結果、フリータイムでは我々学生がキューピットとして繋ぐまでもなく、会場のあちらこちらで様々な団体同士で会話が起こり、非常に会場が賑やかになっていたのを覚えている。筆者は司会をしながら全体を見ていたのだが、この瞬間に「自分達のやりたかったことが想像を超えて実現できた」と実感した。今回50名程の方が参加してくださりアンケートにもご協力いただいたが、また参加をしたいという多くの声をいただいたので、来年に向けてつなげていきたいと思う。

#### ●感想と課題

今回で3回目となった合コンだが、今までと大きく異なる点は、白金と横浜にそれぞれ在籍するスタッフが中心となって進めたことである。これは今後、横浜校舎在籍の学生が白金学生スタッフとなった場合の連携の在り方を試す良い機会となり、様々な課題を発見することとなった。また、今回、スタッフとして初めて企画、運営を行ってみて、イベントを運営する大変さと意思疎通、意見交換の難しさを痛感した。筆者は白金のスタッフでありながら横浜校舎に在籍するという距離的な問題から、報告や連絡を密にしなければならなかったのだが、場所が離れている分危機感も薄れ、連絡が十分にできていなかった。また、当日の課題としては、コミュニケーションを図るフリータイムが少なかったこと、句会やミニゲームなどの説明が長く解りにくかったこと、食事（カレーと白飯）が余ってしまったことなどがあげられる。つまりいたことも多々あったが、最終的には本来の目的が達成され、出会いに溢れた場を提供できたと思う。協力してくれた学生スタッフや教職員の方々、そして、合コンに参加していただいた関係団体の皆様に感謝申し上げたい。

#### 2) その他

MGパール（70ページ参照）のアクセサリーを横浜校舎生協購買部にて販売していただくよう仲介役をし、学内での販売を実現することができた。

#### 【今後の展望】

来年度、新たに入学する新1年生をメインターゲットに、横浜校舎においてスタッフの活動と様々な学生をつなげていきたいと思う。本プロジェクトは発足したばかりで実績は少ないが、焦らず着実に「つながり」を増やし、また合コンで筆者やスタッフが1年間作り上げてきた関係を横のつながりへと変換できるよう、来年度も精力的に活動していきたい。

（国際学部国際学科2年 大西康友）

## [卒業学年報告] 私を変えた一歩

私の大学生活を振り返ってみると、とても充実していたと思う。そして、それはボランティアセンター、MG☆SUZUという存在があったからといっても過言ではない。

私が白金ボランティアセンターに出会ったのは、大学2年の春だった。「何か新しいことを始めたい」と思っていた私は、元々ボランティアに興味があったこともあり、恐る恐る足を踏み入れてみたのである。そこで目に留まったのは「MG☆SUZU新メンバー募集!」のチラシ。アート、高齢者施設でのボランティア、というキーワードを見て「これだ!」と思った。作品作りが好きで、高齢者分野で働きたいと考えている私にとって、一石二鳥の活動内容だった。

SUZUに入ってからには本当に様々な経験をさせていただき、毎日がとても新鮮でやりがいを感じながら活動に励んでいた。そして、2年の冬、代表を引き継ぐことになってからは、私にとって試練の連続であった。SUZUを創ってきた先輩方の行動力や統率力に憧れていた私は、自分がその大役を引き継いでいいのか正直不安だった。さらに学生スタッフへの誘いを受け、迷っていた。自分がリーダー格でないのは分かっていたし、人前での発言は大の苦手だったからだ。それでも自分が変わるきっかけになれば、との思いで挑戦してみることにしたのである。実際、なかなかうまくいかず、自分の中で葛藤することはしばしばあった。しかし、そんな未熟な私をずっと励まし、支えてくれたのが仲間だった。SUZUのメンバーをはじめ、学生スタッフの仲間、ボランティアセンターの職員の皆様は、壁にぶつかっても、その度に一緒に悩んで励ましてくれた。葛藤があった分、展示会などの企画が成功した時は本当に嬉しく、達成感と感謝でいっぱいだった。活動を通して、利用者の皆様の笑顔を見た時の喜びや、人を巻き込んで一から作り上げていく楽しさを学ぶことができ、本音を言い合える大切な仲間に出会うことができた。

MG☆SUZUとして活動し、学生スタッフになったことで、可能性は自分次第でいくらかでも広がるということを学んだ。無事に企画を終えられたということが大きな自信に繋がり、プレゼンや、自分の意見を言うことも、以前よりは自信を持って出来るようになった。活動の上で必要なのは「報告、連絡、相談」である。この「ホウレンソウ」を活動の中で徹底することで、自然と自分を表現する機会が増えたためだと思う。また、ボランティアセンターは面白い種や出会いが沢山ある場所である。地域の方、学生が出会いコラボしていくことで、新しいアイデアが生まれる。そこで生まれた「面白い種」を、人を巻き込み蒔いていくことで、さらに活動の輪が広がっていく。私も、そんな「ボラセンマジック」に巻き込まれ、魅せられた内の一人である。もし、あの時、勇気を出してボラセンに足を踏み入れていなかったら今の私はなかっただろう。自分の成長の場と、素敵な仲間との出会いを与えてくれたボランティアセンターには本当に感謝している。職員の皆様をはじめ、共に切磋琢磨した仲間、活動に関わって下さった全ての方に御礼を申し上げたい。

(社会学部社会福祉学科4年 外山葵)

## [卒業学年報告] はじまりのおと

「ボランティアってなんだろう？」そんな疑問を抱き続けた4年間であった。

大学生活での“ボランティア活動と呼ばれるもの”を通して多くの方たちと関わり、また、その方々それぞれが抱くボランティア活動への価値観というものに触れてきた。“ボランティア”という6文字のカタカナが生み出す単語の意味や解釈はまさに多様で、活動のすべてをこの言葉に収めてしまうことの横暴さを感じるほどである。

私にとってのボランティアとはただ単純に、人に出会いたいという、それだけだったのかもしれない。人は人を求めて関係を構築する。自分自身の興味関心が起点となって、その対象者を求めていく。そして、構築された関係性を変化・強化していく。人と人との関係が持続され、その中でお互いを知り合い、関係を深めながら親密さを獲得し、一緒に何かしたいという方向が決定される。最初は共通の興味関心の持ち主であるという事実が私たちをつなぐ接着剤であったが、短期間で濃密な時間を過ごすことによって信頼関係が関係維持の接着剤へと変わっていった。

そのようにして築かれた人たちと一緒に活動ができたことを、私は本当に誇りに思う。私は、そんな関係の相手であったからこそ活動を続けることができたと考えている。今も継続している活動も単発のイベント企画も、関係への愛着があったからこそ可能であった。私と関わってくれている人に貢献するには何ができるのかということが想いの核になり、直接的にも間接的にも活動に関わってきた。

それは、人のために何かしてあげたい、という立派な精神ではなく、ボランティア活動と呼ぶには程遠いものであるのかもしれない。それでも人と人との関係である以上、どれだけそこに関わっている人のことが好きかということが、活動の始まりや継続の動因になり得ることがあっても良いと感じた4年間であった。

そう感じることもできたのも、今まで私と出会ってくださった方々のおかげである。様々な立場の方々の多様な価値観に刺激され、多くのことを学ばせていただいた。一見すると、それとこれとの関連性が見えない活動もある。しかし、その方々の活動に対する想いや考え方を知ると、関連性が見えなかったもののがつながり、驚くほど納得することができるのである。結局は、その活動を行う方々の核となる想いがブレることがなければ、活動のすべてに様々な思惑や意味があるのである。

これらのことはボランティア活動のみに対応する学びではなく、様々な場面においても適応できる事である。私はいつまでも大学時代の気持ちを忘れることなく、人に対して素直に謙虚に接していきたい。それは私自身を成長させ、それによって改めて相手と出会うことになる可能性を秘めているのである。

そのことを教えてくれた白金ボランティアセンターの職員の方々をはじめ、私たちと関わってくださっている地域の皆様、そして一緒に活動をした仲間たちに心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。

(心理学部心理学科4年 岩永春香)

## [卒業学年報告] 「分からないけど何かしたい」ができるところ

### 1. はじめに

僕が白金ボランティアセンター（以下ボラセン）に初めて行ったのは、3年の夏のことだ。それまでは部活にもサークルにも所属していない、アルバイトばかりの生活だった。

学生のうちに何かしたい。しかし何をすればいいか、何をしたいのかも分からない。ただ何かしたい気持ちだけがあった。僕はたぶん学生のうちにしかできないことがあって、それをしないているのが、もったいない気がしていたのだ。そんな時に友達の誘いもあってボラセンを訪ねた。

### 2. 白金ボラセンで活動を始めたきっかけ

初めてボランティアセンターを訪ねた日、僕はCOSの活動に参加した。そこで偶然ご一緒したOBの山田さんの言葉が心に響いた。「何かやりたいことがあったら、何でも挑戦できる場所だから。どんどんボラセンを活用してよ。」そんな一言だ。その言葉がきっかけで、ただ何かしたいという気持ちが、ボラセンで活動してみたいという気持ちに変わった。

### 3. 白金ボラセンでの活動

ボラセンでは、学生スタッフとして本当に色々なことを経験した。一つひとつの出来事が新鮮でどれも忘れられない経験だが、その中でも山黒が明学学生チームとして参加したファッションショーばれ☆コレ2010と僕が企画に初挑戦した白金合コン2010（以下合コン）が特に印象深い（ばれ☆コレ2010ボランティアセンター報告書第7号P.41 山黒報告参照、白金合コン2010 同P.27 白金合コン報告参照）。

ばれ☆コレ2010にはイベント当日のボランティアスタッフとして参加しただけだが、ファッションショーの様子にはとても感動したのを覚えている。しかしその感動の裏には苦勞して計画を練って準備を積み重ねてきた努力があり、準備段階からのプロセスを経ないと得られないものがあったようだ。それを実感したのが合コンの企画に携わったときのことだ。まだ学生スタッフになって間もないころのことで、大きなプレッシャーがあった。約2か月かけて準備をしたのだが、初めて挑戦することばかりでとても大変だったのを覚えている。それでも他の学生スタッフの皆の助けがあって何とか成功を収めることができた。苦勞した分達成感は大きかったし、準備を通じて学生スタッフの皆と交流を持つこともでき、とても貴重な経験を積んだと思う。また、自分が企画したことが実現したことが本当に嬉しかった。

### 4. 振り返って

最後に、いつもギリギリの行動になってしまう僕を助けてくださったボランティアセンターの職員の方々、また学生スタッフの皆、本当にありがとうございました。ボラセンでの活動は本当に楽しかったです。これからはボラセンの活動で得た経験を活かして、自分の気持ちを実現していけるような社会人を目指して頑張りたいと思います。

(法学部法律学科4年 須田秀語)

## [卒業学年報告] 私と学生スタッフとボランティア

大学2年生の春から学生スタッフとしての活動を始め、様々な活動に参加し、ついに卒業を迎えることになった。学生スタッフとして1つの活動に留まらず、様々な分野の活動に参加したことは、私自身の考え方や物の見方を広げる良い機会となった。普段の生活ではなかなか議論し合う機会はないが、ボランティアセンターの仲間と一緒に1つの活動について意見を出し合い、解決策を見出していくことは楽しく、やりがいを感じるものであった。悩んだり、忙しくしすぎて発狂したくなったり（笑）したのは事実である。しかし、悩めば話を聞いてくれて一緒に考えてくれる、そんな仲間を持てたことは私にとって宝物である。また、自分でよく考え動くということの重要性を学ぶことができた。誰かに指示されて動くのではなく、自分にできることは何かを考え、人に伝え、動くことで自分の成長につながったと思う。

正直、高校生の頃はボランティア＝人のために役立つことという認識であった。しかし、大学で学生スタッフとして活動してみて感じたことは、ボランティア＝自分の世界を広げるものということである。自分がその活動から何を学んでどう成長したのかを考える機会の一つとして挙げられるのが、ボランティアなのではないか。また、私は基本的に欲張りな人間なのである。1つのことにひたすら取り組むストイックな一面を残念ながら持ち合わせていない。様々なことに取り組んでみて自分の向き不向きを確かめたい。そんなわがままな希望を叶えてくれるのが私にとってボランティアであった。様々な分野の人と出会い、話を伺い、自分の考えを広げ、他者の考えを取り入れる柔軟性を持つ。大学生活の中でこのような機会に恵まれた私はラッキーなのである。

活動をするにあたっては学内外を問わず、大勢の人に協力を得た。「お願いします！」と誠意を込めて頼めば、多くの人が協力してくれた。大人の方から見れば、「おいおい。大丈夫なの。」と思ってしまうようなこともしたと思う。それでも、多少の無茶をしながらでも突き進むことができるのが学生の特権なのかもしれない。また、協力していただくにあたって物事の段取りの重要性を感じた。周りの人に協力してもらおうということは、周りの人がその活動を十分に楽しめるように私自身が責任を持つということだと思う。今、何をすべきなのかを周りのことを含めて考えられるようにこれからも努力していきたい。

そんな私の今後の目標は、自分が今やりたいことを常に持っている人になることである。興味のあることを楽しく話すことのできる大人になりたい。私が大学生活を通して出会った大人は皆そうであったように、私も何本もアンテナを立てるように意識したい。

最後に、私たち学生の未熟さを寛容に受け止めてくださり、ご理解、ご協力して下さったボランティアセンターの職員の方々に厚く感謝申し上げます。本当に本当にありがとうございました。

(心理学部心理学科4年 齊藤瞳)

## [卒業学年報告] わたしの原点

私のボランティアセンター（以下ボラセン）との出会いは大学2年次にボラセンが主催する日米NPOボランティア体験学習プログラムに参加したことである。大学に入学する前から日本の貧困問題に興味を持っていた私は、「貧困・マイノリティ」をテーマに半年間にわたって実践的に学んでいくことのできるこのプログラムに迷わず参加を決めた。このプログラムでの活動を通じて、他学部の学生と議論を交わし、社会に対して疑問を持ち、自発的に動いて自分で答えを得ていくことの大切さを学んだ。

プログラムが終盤に向かう頃、知りたい！学びたい！もっと活動してみたい！とやる気に満ち溢れていた私は、ちょうど学年が変わるのを節目に3年次よりボラセンの学生スタッフとなった。学生スタッフとなってからは、ボラセンのプロジェクトチームである「しろかねサラダ」や「山黒」のメンバーとして様々な活動に参加をした。漠然と「なにかやりたい」、そんなことを考えながら、ただ時だけが過ぎていた学生生活も、ボラセンに所属することになってから大きく変わった。ボランティアという切り口から、社会を垣間みることができるといふ点に面白みを感じ始め、様々な企画や活動にどんどん軽いフットワークで巻き込まれて参加していた。これは、やはりボランティアの活動を通じて出会う、たくさんの人やモノ、活動に参加すれば必ず何かを得ることができるといふ点に魅了されていたのかもしれない。ボランティアという言葉は、大それた特別なこととして意識されがちであるが、興味があるからとりあえず参加して、活動したし、やってみると全てごく自然な流れで活動してきたように感じる。

ボランティアを通じた、人との出会いから、本当に多くのことを学ばせていただいた。ボラセンでの活動は明治学院大学の学生だけで行うものではない。教職員の方々や地域の方々を始めとし、様々な団体の方々、他大学の学生、子どもからお年寄りなど、とにかくたくさんの人と共に活動を行っている。自分とは違う様々な人との出会いから多くの価値観の存在を学んだ。そして他者との関わりを通して、自分という人間についても深く考えさせられ、数えきれないほど悩み、そして苦しんだ。しかし、自分を日々見つめ直すことによって大きく成長することができたと感じている。

田舎から一人、大学進学を機に上京した時、知り合いも少なく慣れない東京でぼつりと疎外感を感じていた。しかし、ボラセンを拠点に人と人とのネットワークを大きく築くことができたことは、大学生活で得たかけがえのない宝物である。ボランティアを通じて出会ったたくさんの人々、そして経験を軸に今の自分が形成されているように思う。ボラセンで培ったたくさんを軸に、そして自信に換えて、今度は社会人として奮闘し、今度はボランティアではなく働くことを通じて社会貢献していきたいと考えている。

最後に、ボラセンでの活動を通してお世話になったすべての人々にお礼と感謝の気持ちを申し上げたい。本当にありがとうございました。

(社会学部社会福祉学科4年 小川真由)

## [卒業学年報告] 流れ着いたその先に

大学生活四年間におけるボランティアセンターとの関わりを振り返ってみると、これまでの私の人生には無かったものとのたくさんの出会いに満ち溢れていた月日であったと気付かされる。たくさんの出会いのなかでも最も有益で、かつ、印象深く残っているのは、流動性の美学、砕いて言えば、流れることの楽しさとの出会いである。

「偶然」同じクラスになった方から、ボランティアセンターの学生スタッフの説明会の話聞き、「たまたま」スケジュールが合ったイベントへ「何気なく」参加したところから学生スタッフとしての活動が始まった、という原点からしても、ボランティアセンターとの関わりは、まさに流動性そのものであったうえ、改めて思い返してみれば、「今のあなたに必要なものは流動性である。もう少し柔軟に生きてみたら?」と、どこからともなく示唆されていたのではないかと考えられる程、自身の取り巻く状況を冷静に考える間も無く、タイミングよく流れるままにボランティアセンターとの関わりが始まった訳であり、当時の私は、それ以前の日々ではとても受け入れられなかった「流し、流され」の環境であるボランティアセンターの渦に、率先して飛び込んでいっていたと言える。そのような日々の中で、学生スタッフとしての活動を重ねれば重ねる程、「流動性の機微」とも言える貴重な学びを着実に吸収していった訳であるが、その学びを上手く活かして活動できたのが、「C O S (Circle of Shirokanaise)」としての活動である。「ゆるく・楽しく・かっこよく」というスローガンを基に活動を展開しているC O Sは、まさに、流動性の利点を最大限に活かしており、型に取まらない柔軟な姿勢・周囲の人々や組織を受け入れる寛容な心構えをきちんと兼ね備えた取り組み（例えば、ボランティアセンターの他プロジェクトとのコラボレーション掃除など）がなされていて、その細部に、流れること、流されることこそを尊重しようとする姿勢が反映されていたのではないかと考えられる。このような取り組みは、流動性の重要な存在を認識し始めた私にとって、なくてはならないものだったのではないかと思う。C O Sという組織の姿勢を通じて、やはり、「何か」の存在の大切さに気付き、それと出会うことを願い、求め続けていけば、自然とそれに巡り会い、それをきっかけに、その時々自分にとって必要なものの環が次々と繋がっていくものなのだ、ということを実感した訳であり、その巡り合せの環こそが、その先の人生のかけがえのない体験へ変わっていくのではないかと思うようになった。私の場合の「巡り合わせの環」の原点は、間違いなく、流れ行くままに関わったボランティアセンターそのものであり、そこで知り得た「流動性の美学」が、環を果てしなく広げてくれたのではないかと思う。

最後に、ボランティアセンターに関わる全ての皆様への感謝の意を表し、卒業学年報告の結びとする。四年間ありがとうございました。

(心理学部心理学科4年 塚越浩平)

## [卒業学年報告] 出会いとわくわく、そして繋がり

私が学生スタッフになったのは2年生の春。きっかけは、冬に白金地域の餅つき大会に参加したことであった。それまでも何回か単発でボランティアをしたことはあったが、「何かをしてあげる」ボランティアというものになにか違和感を覚えていて、自分のやりたいことが見つからず焦っていた時期だった。そのイベントに参加した際、白金ボランティアセンターの学生スタッフや、コーディネーターの李さんと出会った。話をしているうちにすごくわくわくして、「この空間だったら何か楽しいことができるかもしれない」と感じ、学生スタッフになろうと決めたのである。それから3年間、私が主に関わってきた活動は「MG パール」であった。私と他の学生スタッフとの大きな違いは私が国際学部生で、4年間白金ではなく横浜校舎に通うことだった。そこで、スタッフになった当初はそれまで白金でしかやっていた制作会を横浜で始め、私はMG パールの横浜代表になった。そしてその年の冬には「ジャングルクリスマスフェスタ 2009 @白金」企画・運営することになった。イベントの企画・運営を行うのは初めてで、右も左も分からず不安だらけだった。イベントをひとつ行うことがこんなにも大変なのかと思わされたし、一人で抱え込むのではなく人に頼ること、自分にはできないと言う勇気の大切さを知った体験でもあった。また、3年生の夏休みにはボルネオ島のスタディツアーに参加した。森一面がアブラヤシの木で覆われているプランテーションの光景を目にしたり、私たちが協力してきた緑の回廊プロジェクトのパークの森を見たり、現地の女性たちと一緒にアクセサリーの制作を行ったり、ショッピングなことも多かったけれど、今まで行ってきた活動が形になって見えるということがすごく感動的だったし、ボルネオ島の現状を目の当たりにして、もっと多くの人にアクセサリーをツールにしてボルネオ島の現状を知ってもらいたいと思った。そして、4年生の時には、岐阜県の郡上八幡と、横浜校舎の生協にMG パールのショップをオープンさせることができた。これもまた、活動が形になった経験であり、すごく嬉しかった。私はこの3年間を通じて様々な人々と出会うことができた。学生はもちろん、MG パールを支えてくれた他団体の方々、そしてイベントなどに参加した際に出会った人たち。私が3年間で頂いた名刺は100枚以上になっていた。学生スタッフは普段名刺を持ち歩いているので、名刺を交換する場面が多々ある。名刺を持っていると、自分のこと、自分が行っている活動のことを話しやすいし、相手のことも質問しやすくなる。私にとって名刺はコミュニケーションツールであったし、3年間多くの人と出会い、話をし、時には議論をしたことが大きな財産になっている。また、横浜校舎に通っていた私はなかなか白金に通うことはできなかったのですが、白金に通うメンバーと顔を合わせる機会が少なかったけれど、イベントを行う時などに大きな支えになってくれた。また意識の高いメンバーたちは本当に「同志」だと思える存在である。私にとってボランティアは「様々な人や場所との出会いの場」である。人と出会い繋がることは楽しいことばかりではなく、しんどかったり、泣いたりすることもあるけれど、自分がもらえるものが沢山あって、わくわくしてしまうので、止められなかった。こうしてできた繋がりには社会人になってからも大切にしていきたいと思う。 (国際学部国際学科4年 北原美奏)

## [卒業学年報告] 4年間を振り返って

私が白金ボランティアセンターの学生スタッフになったのは1年生の夏頃である。授業で知り合った学生スタッフの友人に、ボランティアセンターへ連れて行ってもらったことがきっかけであった。その頃は当時の先輩方が、現在の学生スタッフのプロジェクトを立ち上げて間もない時期であり、その活動に興味を持ち、学生スタッフに加入した。

1年生の頃は、先輩について色々なボランティアに参加し、地域活動や福祉分野などの、さまざまなフィールドで「プレイヤー」として現場で活動した。また、秋には学生スタッフ勧誘の説明会の企画や、学期ごとの情報共有・総括をする研修会、4年生を送る追いコンの企画も担当した。2年生になると、プロジェクトである「COS(報告書74ページ参照)」の代表を任せていただき、「マネージャー」として全体を見渡し、学生をまとめる立場を経験した。3年生では引き続き「COS」の代表を続けるとともに「しろかねサラダ(2010年度報告書参照)」の代表も兼任した。活動の悩みやしんどさを仲間に言えず、ひとりで抱え込んでしまった時期があったが、夏の合宿で他の学生スタッフと共有することで、少しずつひとりではなく仲間と活動に向き合うことができたと思う。仲間に頼ることの難しさを感じたと同時に自分には仲間がいて、相談すれば力になってくれるということ再認識できた。学生生活最後の1年である4年生になってからは、学生スタッフとしての活動のすべてが4年間のまとめであり集大成のようで、今まで別々のフィールドで活動してきたことが、いつの間にか同じフィールドでつながったような感覚があった。特に白金の街を歩いていると地域活動で知り合った方と道端でお会いすることがあり、住んでいる地域以外でもこうして道端で声を掛け合える場所ができたことをとても嬉しく感じている。

また、活動をしていると「“ボランティア”とは何なのか?」といった疑問や、「どうして自分はボランティアを続けているのか?」という疑問にぶち当たることが多く、そのたびに考えては答えが出ないモヤモヤ感を味わった。だが、答えは出ないが、常に自分の中で考え続けることの大切さを知ることができた。そうやって考えたことを議論しあい、語り合える仲間がいるのも学生スタッフの強みであると思う。

この4年間、学生だけでなく外部団体、地域活動、行政など、本当にさまざまなフィールドで活躍されている方々との関わりができ、学生生活を何となく過ごしていたら得られないような経験を沢山積むことができたと思う。活動は楽しいばかりではなく苦しいことも沢山あった。しかし、その経験があったからこそ今の自分があり、またその苦しさを共有できる仲間がいたからこそ、こうして4年間活動を続けることができたと思っている。自分自身、まだまだ至らないところはあれど、活動を通して多少なりとも成長することができたと思う。支えてくださったボランティアセンターの職員の皆様や学生スタッフの仲間、今までご縁のあった方々に感謝の意を表したい。卒業して社会人になっても、学生スタッフで得た経験を生かしていくとともに、ボランティアセンターを通して出会えた方々とのつながりを細く長く続けてきたいと思う。

(心理学部心理学科4年 本間由香)

## 白金校舎ボランティアセンター報告

2011年度が始まる直前の3月、東日本大震災が起こった。そして、「何かしたい」と相談に訪れる学生で、ボランティアセンターは学生であふれ、センターの様子は一変した。大震災が起こったのは、前年度3月の卒業式を迎える前であったが、卒業式は中止となり、2011年度の新学期は、5月の連休明けからとなった。そのような中、卒業を迎える予定だった学生有志が、「卒業式は中止になったが、卒業式の日には何かできることはないだろうか」と、卒業式が予定されていた日に、学内で募金活動を行いたいという相談が持ち込まれた。本学では毎年、白金校舎で2日間、横浜校舎で1日の計3日間卒業式を行うのだが、この発案に横浜に在籍する学生たちも呼応し、白金・横浜の両校地で学生たちが連携し、3日間募金活動を行うことになった。そしてこの企画に、多くの下級生も賛同し、大きな活動となった。その拠点として、白金ボランティアセンターが活用され、センターは物理的な支援だけではなく、活動の段取りや内容の相談などの対応も随時行った。こうして、ボランティアセンターに今まで足を踏み入れたことがなかった学生や、ボランティア活動に関心のなかった学生も大勢集まり、年度末でありながらセンターは熱気で溢れた。そして、卒業式は中止となったが、白金校舎（3月17日、18日）および横浜校舎（3月19日）では、学生有志約80名が募金活動を行い、合計801,324円が集まった。当センターは、1995年の阪神淡路大震災の際、学生有志らが被災地へ赴いたことがきっかけとなり、ボランティア活動に取り組む学生たちを支援しようと、大学内の独立した組織として全国に先駆けて誕生したという経緯がある。今回の大震災でも、その伝統は時を超えて受け継がれ、この募金活動はその後本格的に始まった被災地支援活動への大きなきっかけとなった。

このような流れから、白金ボランティアセンターは例年に比べ、多くの学生たちが利用するようになった。相談に訪れる学生たちの多くは一見、被災地支援に関する学生が増えたが、通常のボランティア活動について相談に訪れる学生も増えた。それは、今回の大震災を機に、今までボランティアに関心のなかった学生が関心を持ったり、身近なつながりを見直すきっかけとなったりしたことも反映されているのではないかと推察する。被災地支援活動が本格的に始まると、教職員もセンターを不在になることが増え、今までのように、学生とじっくり向き合う時間も取りにくくなっていった。さらに、白金ボランティアセンターのスタッフが続けて異動したり入れ替わったことで、白金ボランティアセンターにとっては試練が重なった。しかし、このような状況を機に「じりつ（自立・自律）」するきっかけにもなったという学生の声<sup>i</sup>もあるように、学生たちはしなやかに力強く、ボランティアに関わり続けてくれた。そのような中、昨年度と違い、白金ボランティアセンターで今年度特に多くみられた現象は、様々な学生同士の交流が活発になったことだろう。

白金ボランティアセンターは、3、4年生が在籍する校地でもあり、課外活動に時間を割く余裕のある学生が少ないという特徴がある。したがって今までは、学生スタッフは普段からセンターにいるが、学生スタッフでない学生たちは用があるときにセンターを訪れるということが多かった。しかし今回は、

被災地支援に関わる学生や、その他ボランティアに関心を持った学生たちが大勢訪れるようになったことで、学生同士情報交換をしたり、意見を求めあったり、相談しあったりする様子が見受けられるようになった。たとえば、震災の前からボランティアセンターを活用している学生スタッフが、初めてボランティアセンターを訪れる学生を対応したり、パソコンなどのセンターの備品の使い方を説明したりすることで、学生同士関わるきっかけが増えていった。例えば、被災地支援に関わっている学生たちから、白金学生スタッフが発行しているボランティア情報誌「MG natural」<sup>ii</sup>を参考にしたいということで相談を受け、作成ソフトである In design の使い方や製作方法、段取りなど、彼らが日ごろの活動で身につけてきたノウハウを提供したりした。このような形で、白金学生スタッフらはこの期間、間接的にボランティアセンターの被災地支援活動を支援してきた。また、1 Day for Others<sup>iii</sup>に向け、日米 NPO ボランティア体験学習プログラム<sup>iv</sup> 学生らと共に、食べ物を集めてフードバンクに届けるフードドライブプログラムを企画・実施したり、MG パール<sup>v</sup>もインセンティブに参加したりして、ボランティアセンターの主催事業にも貢献した。このように今年度は、様々な学生たちが、互いの強みと立場を尊重してボランティア活動に取り組み、白金ボランティアセンターは彼らの交流と発展の場として大いに活用された。また、今年度は学生の相談内容が、活動の立ち上げや自身が関わっている活動の広報や説明会を開催したいなど、具体的なものが多く、学生が持ち寄るボランティア情報掲示板の利用も増え、様々な情報が発信された。特に海外ボランティアに関する相談も多かったのだが、国際ワークキャンプに参加した学生たちから、「学生の立場で他の学生たちに海外ボランティア体験の経験を紹介したり相談に乗りたい」という相談を受けたことで、外部団体と合同で、海外ボランティア説明会を開催することとなり、海外ボランティアに関心のある学生と、経験者の学生たちの双方のニーズを繋ぐこともできた。他にも、ふれあい運動会やみなとキャンプ、いちご狩り<sup>vi</sup>、スリランカ大使館主催の「スリランカフェスティバル 2011」など、毎年協力している白金校舎近隣地域の活動にも変わらず参加させていただいた。地域の方々からは、今年は地域活動への学生のボランティアの参加が減少するのではないかという心配の声を多々伺っていたのだが、多くの学生が参加してくれた。東日本大震災からもうすぐ1年が経とうとしているが、今後は、継続的な支援とともに、日常のボランティア活動へいかにつないでいくかが課題となっている。被災地支援のニーズは日々変化していくなか、このような社会的要請に、当センターが、大学ボランティアセンターとして蓄積してきた歴史と、様々なボランティア経験を有する学生が豊富だという強みをどのように活かしていけるのか、本学が東日本大震災復興支援活動において掲げている「苦しみを分かち合い、人が人として、人のために、共に生きる」という理念の下、今後も模索していきたい。 (李)

i 本報告書「白金ボランティアセンター学生スタッフチーフ報告」を参照。

ii 本報告書「白金ボランティアセンター学生スタッフ MG natural」を参照。

iii 本報告書「1 Day for Others 報告」を参照。

iv 本報告書「日米 NPO ボランティア体験学習プログラムについて」を参照。

v 本報告書「白金ボランティアセンター学生スタッフ MG パール」を参照。

vi 本報告書「白金ボランティアセンター学生スタッフ白金近隣地域の活動」を参照。